

当麻 in · Dreamland

当  
麻  
i  
n  
·  
D  
r  
e  
a  
m  
l  
a  
n  
d

敦賀市立沓見小学校

六年

山田光留  
やま だ ひか る  
やま ぐち り な  
山口莉那  
あさ の ゆ か り  
浅野有佳里  
にし だ せ れん  
西田静恋



各務原市立稲羽東小学校

六年

小野木萌恵  
お の ぎ も え  
ち でん た ま の  
千傳珠乃  
に わ な つ き  
丹羽菜月  
よ こ や ま こ は る  
横山呼春

二〇一〇年、多分フランス、とある街……というか分からない。

「ここはどこなんだ——」

オレ、上坂当麻はうめき声をあげる。周りは外国人ばかり、みんながジロジロとオレを見てくる。なぜこんなことになったかと言うと、話は一時間前にさかのぼる……。

—東京—

今は子どもたちが大好き、いやあるいは大嫌いな夏休みだ。オレは宿題をしていた息抜きに、ちよつと散歩をしていたところ、なぜか木にぶつかった。下に穴が開いていたので、ちよつとのぞいてみよつかなくと、軽い気持ちでのぞいてみたら落ちてしまった……。

「NO……」

（ここは何の世界なんだ。アリスですか？ それともなんだ？ 最近アニメ

でよくある、タイムスリップってやつですか？)

落ちたところには、外国人がいっぱいいて、みんな(なんだこいつは?)と  
いうような感じでオレを見てくる。とりあえず言ってみた。

「ボンジュール」

また周りの人が、なんだこいつという目でオレを見てきた。とりあえず歩い  
ていると、警察が話しかけてきた。言葉は……全く分からない。

「……」

「アイ・ドント・ノオー。ジャパニーズ。人間です。迷子です、多分」

やっぱりあっちも意味が分からないようだ……。どうするオレ、ガンバレ、  
オレ!!

「ノーマナー、ノーマナー、ヘルプミー……」

やっぱり、なんだこいつという顔をされた。どうしよう。不幸だ。何でこん  
なところで……。

「あああああああああああああああゝヤバイ。不幸だあああああああああ  
もう死にもものぐるいで日本語を話してみた。」

「夏休みに宿題してて、休けいで散歩をして木にぶつかって、大きな穴があつたからのぞいてみたら、落ちてしまつたんです。で、なんとかフランスということが理解できたんです。それで英語もしゃべれないし、適当にしゃべつてみただけです。そんでお金もなんもなくて、不幸ということがわかつたんです」  
ジェスチャーも使つて話してみただけけど、分かつてくれない。どうすりゃいいんだろ。」

オレが途方にくれていると、

「こんにーちはー。わたーしジャパニーズ語、習つてまーす」  
と外国人のおっさんが話しかけてきた。

「だいじょーぶYO！ わたーしが助けーてくださいまーす」

日本語がところどころおかしいよ、オイ！ オレはこれよりひどい言葉を警

察に言っていたのか……。一生のはじだ……。

「だいじょぶYO！ ついてきてYO！」

なにかもがあやしいおっさんだが、オレはついて行くことにした。知らない人についていっちゃだめだよ！ なんて知ったこっちゃない。

「ここーはフランスパンが有名なパン屋だYO！ フランスパンはどこにでも売っているけどYO！」

と、おいしいお店の情報をあれこれ教えてくれた。

「だからノーマネー、ノーマネー」

歩いているうちにきれいな家に着いた。

「ここは私の家だYO！ あっ、紹介が遅れたYO！ わたーしの名前はー、ウチャードだYO！ あだ名はウツチャンだYO！」

はい……。ウツチャンですか……。

「わたーしには今日たん生日のむすめが二人いるんだYO！ 祝ってくれYO！」

何でいきなり会った人に、おめでとーなんて言わなくちゃいけないんだろうか……。まあ、適当に言えればいいか。

「おめでとさーん」

「？」

二人は首をかしげる。あつヤバ、二人はフランス人だったんだ！ オレはがんばってジェスチャーを試してみた。(できるだけ)にこやかに笑ってはく手をしてみた。そしたら通じたみたいで、あつちも笑ってくれた。ちよつと安心。

「わたーしのむすめ、超かわいーだろう？ 名前はカグーラとヤグーラって言うんだYO！ 特技があるんだYO！」

(※ここからはフランス語……日本語にやくしまーす)

「カグーラ、ヤグーラ、お兄ちゃんに見せてあげなYO！」

「はい」

(※内容はウツチャンが日本語でオレに教えてくれます)

どんなのだろう……とオレ、当麻が思っていると、

「どうもどうも」

と家の舞台から二人が出てきた。

「カグーラ」

「ヤグーラ」

「でーす」

「コント！ すこんぶ！」

「オイッ、すこんぶたべるかヤグーラ」

「食べてみたいな」

パクパク……。パク。

「なにこれ！ レモン百個よりもすっぱいよ！」



「つて、レモン百個も食べたことあるんかい！ でもそのうち、すこんぶもくせになるよ」

「プツハハハ」

オレは思わず吹き出してしまった。

「ありがとうございますー」

二人そろって言った。

「おっ、そうだYO！ お前の名前聞いてなかったYO！」

「オレ？ オレの名前は当麻、よろしくな」

「よしトーマ、今夜はわたーしの家でとまっていけ」

「えっ、いいんですか？」

「これもなにかのえんだ。しっかり休んでいけYO！」

「サンキュー、ウツチャン！」

オレは不幸ではなかったらしい。こんなにも親切にしていただけなんて…。

でもオレはまだ知らなかった。この街で起きている、大きな事件を……。★

オレは、だれかに肩をたたかれている。ウツチャンの声がする。

「トーマ、朝だよ。起きて」

どうやらもう、朝みたいだ。まだねむい目をこすりながら、起きあがる。フランスに来てから二週間。カグーラ、ヤグーラとも仲良くなり、毎日コントを楽しませてもらった。

その日、ウツチャンとオレは散歩に出かけた。ウツチャンが公園のトイレに入ってしまった。オレはその間、近くをうろついていた。すると……。

「キヤー、だれかー、警察を呼んでー」

周りの人が叫んでいる。オレは、意味が分からなかったけど、ここにいちやいけないと思った。でもだれかに手首をつかまれた。ウツチャンだと思いふり向くと、知らない男が立っていた。その手には銃!? ちょうどその時、トイレから出てきたウツチャンがオレ達に気づいた。ウツチャンは動揺している。で

もすぐにウツチャンは冷静になって、携帯で警察に連絡しようとした。その時、オレを人質にとっている男が、

「警察に連絡したら、こいつの命は無い」

と、ウツチャンをおどした。もう警察に連絡する手段はない。オレはもう死んじやうのか。もう、助かる手はないのか……。

その時警察がやって来た。しかし、男はオレを放そうとはしない。警察が犯人に声をかけた。

「ゴット・フリード。今すぐ銃を置け。おまえは指名手配中のゴット・フリードだな？」

その時ウツチャンが、

「お前がゴット・フリードか。さあ、早く当麻を放せ!! お前が当麻をうてば、お前も警察にうたれるぞ」

「何だと? ふざけるな」

ゴット・フリードとウツチャンの言い合いが始まり、だんだん激しくなっていく。そのスキに警察がゴット・フリードに近づいていき、取りおさえようとした時、「パンッ」と銃声が聞こえた。振り返ると、ウツチャンが肩から血を流してたおれていた。

「ウツチャン!! ウツチャン!!」

オレは、かけよってウツチャンの名前を必死で呼び続けた。ウツチャンは救急車ですぐに運ばれていった。

「ガチャッ」ゴット・フリードはその場でたいほされた。

病院ではウツチャンの手術が終わり、医師が出てきた。

「ウチャードさんは無事です。が、肩がまだ自由に動かないので、完治するまでには時間がかかります」

「ちなみに、完全に動けるようになるまで、どれくらいかかるんですか」

「だいたい、一カ月前後です」

オレは、一カ月も、ウツチャンがいない生活なんて考えたこともなかった。オレにできることといえば、毎日会いに行くことや、カグーラ、ヤグーラ、ウツチャンの家を守ることぐらいだ。

オレは、ウツチャンにお見まいを用意しようと考えた。

(フランスでは、どんなものを持って行くんだろう……)

オレは見当もつかなかったから、少し遠いが、図書館に行つて調べたことにした。たくさんの本が並ぶ中で、目にとまった本があった。『病院・お見まい』オレはその本を手にとって、パラパラとめくってみた。すると、本から、サツと一枚の紙が床に落ちた。その紙を拾ってみたら、何と日本語が書かれていた!! オレはその内容にもびっくりした。何かの日記の一ページだった。

『七月一日、オレは、散歩していたら、木の根もとの穴に落ちてフランスらしき所へ来てしまった。訳がわからないが、どうすれば帰れるのか発見したので、文章に残して、だれにも見られない場所にかくした。忘れないように、地図も

残しておこう』

と、日記に地図も書いてあった。

(これはっ!! まさにオレのパターンだ! 同じ目に合った人がいるとは!)  
とにかく行って見ることにした。

(ここのはずなんだけど……)

地図の目的地に着いたら……何か見覚えがある。

(ここは!? フランスで一番最初にオレが来た場所だ)

オレは、びっくりした。でもうれしかった。東京へ帰るのに一歩近づいた。  
手がかりを見つけないくは。オレは辺りをほりまくった。

一時間は経っただろうか。カツンツ。オレのつめが金属に当たった。ほり出してみると箱が出てきた。古い物なのだろうか。かなりサビついている。とにかく開けてみると、二枚の紙が出てきた。一枚を開くと、

『よくぞ見つけた。君は日本人なんだろう。帰りたいたならオレの指示に従って

くれ。満月の夜、ある場所にある木の下に立つんだ。そして日本語で帰りた  
場所をゆっくり三回言うんだ』

ある場所とはどこか。それさえ分かれば。オレは、箱の中にあつたもう一枚  
の紙を見た。

『その場所とは、お前が立っている所から、まっすぐ北を見ろ。そこに大きな  
木があるはずだ。ま、幸運をいのってる』

オレは感激した。だれが書いた物か分からないけど、大きな手がかりになっ  
た。

それから二週間が経った。今日はウツチャンが退院する日。見つけた手がか  
りを、ウツチャンに話してみた。ウツチャンもおどろいていたが、喜んでくれ  
た。けれども何かさみしい。もうウツチャンに会えなくなる。でも帰らなきゃ。

オレは東京の場所を思い出そうとした。

(森……公園だった……緑の公園だ!!)

やっと思い出した。もう、準備はできたから、あとは、満月の夜を待つだけ……。ウツチャンと過ごす時間もだんだん短くなってゆく……。

そして、今日は満月の夜。当麻は北を見て言った

「緑の公園、緑の公園……緑のこう……えん……」

「当麻、本当に別れの時が来たんだな……」

「ああ。今までありがとう。元気だな」

目の前に現れた穴に、オレが入ろうとした時、ウツチャンがネックレスをくれた。お礼を言っつて、穴に入った。道のような所を進んだ。

先に光がある。

東京？

なぜか、自分のベッドの中で目が覚めた。

でも、オレの手には、ネックレスがあつた。